



觀 照

2

家元制度について……土岐善麿
家元問題雑談……同人
關寺小町斷章……金春光太郎
名流藝能觀照會……升屋治三郎
觀 照
九月の劇評
大阪歌舞伎座……北岸佑吉
文 樂 座……大西重孝
新 國 劇……澁谷武雄
表紙・カット……須田國太郎

家元制度に就て

土岐 善麿

家元制度といふものに就て、その發生の歴史や傳統を一應調べてみたいと思ひながら、まだその資料を集めずにあるので、さういふ點に關したしかなことの論じられないことはわれながら遺憾であるが、然し現在において、家元制度といふものは存續し、能樂、舞踊、邦樂、茶道、花道等に家元と稱せられるものがあるのであるから、その現實に對して、若干の考察を加へることにより、現代の家元制度の歸趨を定めることは可能であらうかと思はれる。

家元制度といふものは、何といつても封建的なものであることは否み難い。藝術的な面において、經濟的な面において、共に、支配と從屬の關係に立つことによつて維持されて

ある制約であるから、あらゆる封建性をぬぐひ去つてしまはなければならぬといふ時代の要請を眞正面から受けることなれば、存續され得ないものであり、家元といふものも一般的に「追放」されてしまふはずのものであらう。殊に藝術においては、個性が尊重され獨創力が推賞され、それによつて新しい發展が期せられるのであるから、謂ゆる新進氣鋭のものが家元制度の否認を叫んで獨立を宣するといふやうなことも、從來

からも外からも、支持されるはずはあるまい。かういふ動向のうちには、その家元が家元たる資格をみこめられず、従つてその家元制度が崩壊してゆくことは、必然でもあり當然でもあると思ふ。

後は一層その形勢にあるかも知れない。これに對し、家元が藝術的にもそれを統制してゆく實力がなく、正しい藝道の傳統をつたへ得るものとも認められず、また經濟的にはただ搾取を事とするばかりで、人格的にも一道の指導者たるに適しないとなれば、これは家元たる信頼と權威をたもち得ないものとして、流派の内

てあるものが、藝術的に眞の實力者であり、人格者である場合、みづから家元といふ舊い理念と形式に依らないでも、流派の内外から、その地位をゆるがすやうな策謀の餘地もなく、嚴として藝術の世界に立ち得るであらう。そしてその家元は、更に家元としての後繼者をつくるために、正しい藝道を傳へることに努力し、その業績を完成することを一つの大きな職責とすることに、その道統を次ぎの時代にうけつがせて行く従つて、家元はかならずしも世襲であることを要せず、世襲制度を固執することのために、却つて正しい藝

道をつたへ得ず、その流派を衰滅に導くといふやうなことも起りうるであらう。ただ、その藝道が多年の且つ異常な修業によらなければ到達し得ないやうな――たとへば能樂のごとき――ものであると、その修業における條件からみても環境からみても、世襲的になるのが極めて自然であり、後継者も、その責任を自覺して刻苦精勵することになれば、そこに争ひ難い實力者として一流一派をひきいてゆくといふことになるであらう。

そこで家元制度といふものを昔の封建性から解放して、新しい藝統保存の方法を考へ、これを假りに家元制度の名によつて呼ぶことにすれば、それぞれの流派に審議機關を設置する必要が起つてくるかも知れない。更に夫々の流派を超越した最高決定機關をつくることにもなるかと思ふ。この機關は、一切の情實

を排して公正に運営されなければならない。もし家元たる適任者がなきときは、しばらく家元をおかすに、それを預つておく、このことも、従來とてなかつた事態ではないが、その預りどころを右の最高決定機關にしておくのも一つの方法ではあるまいか。

家元の經濟問題が考へられなければならぬ。藝道に就ては、自己の練成、後継者並に後進者、直門者の指導、養成による藝統の保持と進展とに主力を集中することとし、出演料はその収入とするに於て、免狀授與、テキストの著作權、後授者の寄附等はすべて流派内の經營機關に寄託し、その収入の中から一定額を家元が受けるといふやうな制度にしたら、家元としては藝道に一意専念することができらう。何かから何まで家元が獨占し、一門のあたまをはれて、生計をいとなむといふ

やうなことは、この時代には通用しないであらう。

戦争以前までは、家元の生活といふものは随分せいたくなものでもあつたらしい。軍閥、官僚、財閥といはれるものゝ生活様式とはまた別な類應的なせいたくといふべきものであつたのではあるまいか。豪者な邸宅を構へ、妾宅をつくり、女の弟子達となれ合ひ、人妻をおかし、のみ歩き、酔ひ痴れ、ソロリとした風體をして、それが「藝術家」の本領でもあるやうに振舞つた「家元」もあつたやうに聞いてゐる。然し、そんな超倫理的、反疇代的な存在は、今では許されもしないし、實際の生活現實からいつても、そんなゆとり、のあらうはずもない。家元は藝人やたいこもち的なものであつてはならない。社會の一職域における一師表であるといふ誇負と矜持をもつて謹嚴に身を處し、文化の昂揚に參劃す

るだけの氣位をもつてゐなければならぬ。そこに性根がすはつてゐて有識者の支持と監督に堪へ得るもののみが、家元としての人格をたもつ所以であつて、家元制度の革新も、さういふ家元によつて自發的に實行されることになるのであらう。それにはさよりのいいアドヴァイサアも必要であつて、その得られるのも得られないのも、家元の人間の價値によるといつていい。

かういふ時代になつて、いづれは家元も家元制度も滅亡消失の運命にあるから、當事者は覺悟をしておくほかはあるまい、さういふやうな見解が一部にはあるやうにも察せられるが、それでは日本の藝術の傳統に對して、餘りに苛酷であり冷厳であり過ぎる。もつと實情を調査して、具體的解決案をつくることにしなければならぬ。それにはたしかに今が最も適切な時期なのである。

序ながら、次ぎの話をここにかけそへておかう。それは或る能樂の宗家から聞いたのであるが、口傳とか秘傳とかいふものは、一般にそれほご内容のむづかしいことをいつてゐるのではなく、知つてみればタワイもないやうなこともあるが、然し、一曲のうちにはおほむね一二個所づつさういふところがあり、その個所がそのやうに演ぜられた場合、それは正式に習つたものであることが分る。正式な稽古を受けたものか、一種のモグリのな、或は獨學、獨習的な藝かといふ、その判定のために口傳や秘傳があるともいへる。しかも宗家や師藝家は、それを特に口傳とか秘傳とかいはずに教へておくのであつて、そこが却つて口傳とも秘傳ともいへることなのだ。

これはおもしろいことと思ふ。歌學における古今傳授も、いまからみるに、中世的なバカメカしきである

が、それをかういふ意味に解すると藝道の興味になる。ただその口傳や秘傳を何か重大なる神秘的な、他見他聞を許さないものにして、金に換へたりするから、家元制度の非難の中に加へられることにもなるのである。(昭和二十一年六月二十八日)

釋方祐百二十五回忌

能組

景 清 片山九郎右衛門

松 風 橋岡久太郎

泣 尼 茂山彌五郎

橋辨慶 觀世織雄

道成寺 山本博之

昭和廿一年十月廿五日

午前十始

於 大槻能樂堂

主催 山本能樂會

家元制度 雜誌談

本誌同人座談會

林 秀雄 北岸 佑吉 澁谷 武雄

武智 鐵二 沼 艸雨 大西 重孝

林、終戦後一ケ年を経て、民主日本が着々と建設されて行く今日、最も非民主的と見られてゐる藝道の家元制度は、當然問題にされるべきで、本誌にはひろく藝能界に關心を持たれてゐる土岐氏の御意見を拜見できたが、ひとつ、みんなでも検討してみよう。

北岸 どうだらう、果して日本の藝道には家元制度が必要だらうか。

澁谷 そりや、日本の古典藝道は、すべて傳承藝術だから、家元制度は必要だ。

沼 能樂をはじめ、茶道でも、華道

でも、腕があるからさて、みんなが勝手な行動をさるやうになつてはその藝道が弱れて行くから、家元の權威でもつて、統制して行かればならぬ。能樂が今日の姿で傳へられて來たのは、確かに家元制度のおかげだと思ふ。丁度、天皇

制の論議と似たものと思ふが、藝道での最高權威の表徴として、流儀の統一には家元をたてるがよい流儀の運営は、土岐氏のいふやうに、別に委員會を設けてやつて行く。

武智 家元制度が発生した時代を考

へるさ、能でも、經濟的の理由からだ。そして、家元が藝事の上の監督の地位に立つて來た。藝事上の種々の問題を統一して、古典藝術として一の規矩にはめて來た。はじめは經濟的だつたのだから統制が段々藝事の方に及んで來たのだね。

北岸 同感。この必要論にみんな賛成ばかりらしいが、反対意見はないがしら。

澁谷 反対はいくらでもいへるよ。大西 反対さいふ意味が違ふが、文樂の人形が衰微の一途を辿つて來たのは、この制度がなかつたからださへる。

武智 文樂では師弟關係はあつたが明治以後それが弱れて來たとき、家元がなかつたから、背景としての封建的地盤がなくなつたので藝まで弱れてしまつたのだ。

北岸 藝術上の統制の仕方について

も種々論じればならぬが、問題は家元の經濟的な搾取にあるわけだらう。

林 華道や日本舞踊の家元には、そんなのが多いらしいね。金をさるだけの家元なら不必要だ。肝腎の藝事の統制はされてゐないんだから。

北岸 梅若問題の起りも、家元の權威が墜ちてゐたからだ。

武智 現に金春流では、家元が奈良にゐて、櫻間といふ家が中央で宗家代理といふことになつてゐる關係から、流儀の型とは違ふものが通用してゐたやうだ。「熊野」の三段ノ舞のときは「それ草木は雨露のめぐみ……」とシテは幕内で謡ひ出すのが流儀のきまりなんだが、光太郎氏が去年演じるまでは、誰も知らなかつた。金太郎氏は

橋懸りで謡つてゐた。道雄氏の父なんかは、やはり家元の型を承けてゐたさうだ。

大西 現今では、家元制度の確立してゐるのは能樂界だけだし、必要なもの……

林 日本舞踊なんかは、もう崩れてしまつて、家元と名乗つてゐてもないのと同じだれ。

澁谷 日本舞踊の各人各流といつた有様は言語同斷だが、能なんかでは、家元制度のために、傳承にのみ固まつて、藝が伸びて行かない欠點が家元制度にはあるれ。

武智 流儀の殻に閉ちこもつてしまひ易い。

大西 易きにつく。

沼 規矩を守つて決つた型に従ひながら、それをよい意味で破つて行くのでなければ進歩はない。これが藝道だ。

大西 規矩とは、こゝから出てはいけないといふことではないが、それを力柄のない者までが、勝手にやつては困るので、統制が必要なのだ。

北岸 その統制を經濟的な方法でとつて來たのが、家元問題の癆になつたのだれ。それを改めるといつて、下手な民主的方法にしたら、却つて藝がめちやになる惧れがある。

武智 その悪い例が人形さ。するぶんひざいかられ。

大西 自己を主張する前に謙虚な氣持で傳統の藝の嚴しさを知らねばならぬのだが……。

沼 能で、片山幽室が「他流の型でもよいと思つたら、とり入れてよし」といふ意味のことを言つてゐたのを、故觀世左近氏は、インソツプの孔雀の羽根をさした鳥を例に

ひいて非難してゐたが、こんなのを生半可にやられては困るけれど、林六代目はそれをうまくやつてゐる。

澁谷 彼の場合は創作力だよ。

大西 能とお茶は無理だ。

武智 まあ、能楽だけは家元の權威が保たれてゐるといつてよいだらうね。古典藝術の根本理念の解明の上に立つた家元と、單に經濟上の必要から起つた家元とを區別して考へなければならぬ。

大西 歌舞伎でも、市川宗家といふが、團十郎はどうかね。

澁谷 古い團十郎は興行主ぢやないか。段々實力と權威が加はつて来たが、後世になつてからは十八番

の版權のための存在でしかない。

武智 當時は彼の藝も、まだ古典藝術ではないから。能も發生の當初は同様と考へてよい。

北岸 それが江戸時代に四座一流を

確立して来たわけだ。それも幕府の嚴格な庇護、統制がなければ、どれだけに分裂してゐたか知れないと思ふ。

林 華道や邪舞は、すゑぶん澤山家元が出来てゐる。少し出来るやう

になると、獨立して、勝手に家元を稱するのだからうが、澤山あるほど怪しい。これは斷然排撃せねばならぬ。

武智 長唄では、現在家元と稱するのが三十何軒があるさうだ。

澁谷 杵屋に、稀音家に、吉住、芳村、松永、富士田、それに最近は和歌山も出来て、門外漢にはわからんよ。

沼 能楽では五流のほかにあつた梅若流が昨年復歸して觀世流の一派となつたが、同じ觀世流のうちで

も、藝風の違つてゐる點をあげたなら、十二、三派は數へられるよ。左近氏直門の春秋會、鏡之丞氏の

西明、喜之氏の九舉會、万三郎氏の高輪派と、それぞれ違つたところがある。六郎氏の梅若派は公認だし、橋岡、大槻、京の片山、林、大江、大阪の生一、大西、手塚、みな違つてゐる。

大西 現實は華道など、變らないのだね。

北岸 尤も、流儀としては統制は、まつとれてゐるのだが、實生も金剛も金春も、みな二派くらゐは區別できるよ。

武智 狂言でもひどいな。和泉流には野村のほかに山脇、三宅があるし、大藏流でも東京の山本と關西の茂山とはする分違ふ。

林 同じ茂山でも三家をそれゝ異同ありだ。

沼 今の各宗家は、經濟的にはうまくやつてゐるかも知れないが、藝事については全く監督不行届だよ。ほつとけば益々崩れて行くばか

りだ。

澁谷 それをどうして行くか、だ。

北岸 古典藝術家たるものは古典藝術といふものにもつと自覺がなければいけない。

大西 文樂の大夫でも「風」といふことをよく知らぬから。一体「風」があつたのは明治の中期頃までだらうな。

武智 天下の團平、越路でさへ「宮守酒」の風を變へたといふので評判が悪かつたことがあるから、明治十年前後までは義太夫の風が一般に知られてゐたのだらう。これは越前風なのを、それを駒太夫風で押通さうとしてファンから拒否されたわけだ。一体、團平は一時は派手な好みで、團平が手をつけるさ皆な派手な方に變つて行つたその彼も「又助住家」は手をつける所かない、さ云つたさかいふことだ。

林 ともかく、淨瑠璃の風といふものは、もう誰も知らないから。

北岸 家元制度の經濟的解決は、こりや常識だな。

澁谷 具体的にどうするか。家元はみな追放するか。

沼 能なら能樂界全般に及ぶものにするか、各流派別にするかだが、民主的な委員會制にして運營して行く。

澁谷 免狀料さか、テキストの印税さか、經濟的な面は委員會でやつて行けるが、藝事の縮りは委員會でやつて行けるか。

沼 やれるだらうと思ふ。

武智 流儀が護られて行くなら、家元はどうでもよいといふことにならね。

北岸 藝の基準を示すものとして、代表的な存在は殘してもよいのぢやないか。それを委員會で選定するにも、當然その資格は嚴重にせ

ねばならぬが。

林 家元を世襲でなく、實力のある人を選んで行くやうにするのかわらぬ。

北岸 さうだ。

大西 だが、碁・將棋のやうには行まい。

林 やはり、自然と家柄の人の中から選ぶことになるのではないか。

武智 現實にはさうなるだらう。文藝復興からの天才を調べてみる。教養のない下層階級からは出ないといはれてゐる。殊に藝事には環境の力が大きく働くから、やはり、その天才も相當の地位の中から生れて来る。役者でも、例外は四代目歌右衛門位ではないだらうか。仲藏も志賀山の家元だし。

北岸 従來の封建的な組織では、なほその上に、一人を守り立てるやうに出来てゐたのだから、さうされてゐる相當のものになれなければ

(以下13頁下段へ續く)

關寺小町斷章

金春光太郎

この十月十七日、私の還曆記念能に大曲「關寺小町」を披きます。これは金春流では一子相傳となつて居りまして、流儀と致しましては、寶曆九年十一月六日に江戸本丸中興舞臺にて六十九世金春氏綱（當時五十歳）が勤めまして以來、百八十八年ぶりの上演でございます。その以前には二百四十六年前に本丸表舞臺で六十五世金春元信（七十六歳）が元祿十四年十月二十二日に勤めて居るのみであります。この元信は諸侯の舞臺を合せまして、「關寺小町」を十回ほど勤めて居ります。

一体この曲は各流を通じまして最高位に置かれて居りますが、老女物のことですから、大して型もございません。然し私方の傳書を見ますと

随分たくさんいろ／＼なことが記してあつて、書物の分量はだいぶ多いのです。例へば作り物につけます短冊に致しまして、熊野の短冊の段のやうな扱ひ方がございますが、その作り方の注意書に。あまり薄いと風にひら／＼するから、厚い目にするやうにご書いてあります。これは河原の勤進能などの注意で、今日の能樂堂にはあてはまりません。然し短冊をシテが落す型がございますから、うまく落ちますやうに、私はやはり少し厚い目に好まうと考へて居ります。又金銀の短冊をつけたシテもあつたやうですが、これはよくないと記してあります。然し各人の好みだから、どちらがよいかはめい／＼が決めよと記してございます。すべてこのやうに、善惡の判断を下さす、各人の好みによるやうになつて居ります。

私は短冊はやはり白に致しまして

手に取つて見れば薄墨か泥で、簡単な繪が描いてある程度にしむいこ存じて居ります。短冊の數は七枚を定式としてありますが、五枚でもよろしいのです。藁屋もきり／＼ましてもよいと記してありますが、大体は普通のがよろしいやうです。藁を繼いで先を内らへ折りまげよといふやうな注意もしてあります。

かう云ふ遠い曲ですが、時々致しませんと、御覽になる方で絶えますから……私は觀世流の大江竹雪さんのを拜見しました。その時の作り物は大分凝つた、綺麗なものでした。左近さんが世中でしたから、あの方のお好みであつたのでせうか。万三郎さんも勤められましたが、大体將軍家が觀世流びみきになられてから、當流などではあまり勤める機會がなかつたやうで、金春廣成などもあれだけの名望と体格さを持ちながら遂に勤めませんでした。

（文責者 武智鐵二）

観 照



來演中止にはなつたが九野南座で吉右衛門が出すはずだつた狂言のうちで一番期待したのは「俊寛」でも「河内山」でもない。景物的に夜の序幕に据えた「だんまり」である。こゝ暫く東西とも何故出ないでゐるのかと思ふが、數年前、明治座で見た猿之助一座のそれは今も鮮かに臉のうちに残つてゐる。だんまりが歌舞伎劇としても遊戯的な派生物たることを背がはねるわけでもなく、いはゞ映畫の冒頭のタイトル、人物紹介の幾齣に當るにすぎぬことも認めるが型といひ、音楽効果といひ、歌舞伎のエッセンスといへるのは誰も否定できまい。俳優にとつても、この上

演は腕を磨くによいものたるを信じる。昭和十五年の記念藝能祭には、結局上演を見るに至らなかつたが代表的歌舞伎の一として「だんまり」

が選定されてゐたのは我意を得たものだつた。今度も失望は大きいが、型物の神様みたいな吉の一座で見られると思つたゞけでも陶然となつた短いものなので臺本を寫させて貰つて來た。外題は「御攝劇暗争」と書いて「こひみきかぶきのだんまり」を讀む。播磨屋に因んでか、「播磨嶽山中の場」となつてゐた。(啓)

第四回大毎演劇教室の「戀の苧環」を見物しての歸途、心齋橋筋で樂屋入り途中の甞雀氏に出合つた。會話の終りに來春の鴈治郎襲名について何卒よろしくとの挨拶を受けたが、其表情の中には明るい様々明るくない様なものがチラリと閃いたのを見逃せなかつた。中村鴈治郎といふ名

前は一代きりといふ白井會長との約束は今では宣傳材料の一つに使はれてゐる様だ。

東京では十一月に十代日團十郎と十六代目羽左衛門が出現するのだが大阪の鴈治郎といふ名前は傳統的價値から言つて東京のそれには及ばないかも知れない。併し白井會長の自己満足といふ點では海老蔵や家橋の心境を凌ぐものがあらう。こゝに歌舞伎道の持つ傳統的弱點といふものが窺はれる様な氣がする。二代目でも三代目でも又十代目でも要は人材の問題である。(林)

◇ 杉木立の頭の方だけ陽があたつてゐる夕暮の谷あひ　せゝらぎ
濕つた杉の枯葉の上に　靴を脱いでそぐと素足を置けば
せゝらぎと　虫と　折々澄んだ鳥の聲のみー
杉は語らない、ごくだみの花は白

く風に揺れてゐる

風は騒がない、鳶は靜かに眠つてゐる

音のない世界、それがわたしを、休ませる――

木の葉がひさりてに芽吹いて行くやうに、一人しづかに仕事をしたい

語らず 吹聴せず いためつけられず 種物のやうに 仕事をしたい

喧嘩と おもやべりと 社交と

臆測と 電車と 食事と ラヂオと 氣疲れ

夢にまで現実的な夢を見る今日此の頃の生活 あ、 (梅本)

仲秋明月の宵、萬燈籠に映える春日若宮社頭に、百年ぶりに復活した御社上り能は、總て慶長年間といふ繪巻による規模で催された我々同人も今度の復興の中心が多田氏である關係も、各々名家傳來の小直衣、或は狩衣、又は直垂を吉川觀方氏の故

實正しい説明をきながらつけても

らつてその姿で陪觀、常の能と違ふ嚴肅さを感じたがこれは出演樂師の方々も皆同じ意見であることは後で聞いた、演じる方も見る方も環境は

大切である、此の日は總てに亘つて楽しく嬉しいものであつたが私が何より嬉しかったのは後で夫和田宮司が挨拶された折、自分がかうした行事のあるのを知らなかつた、多田さんにははれてはじめて知つたといふ

此の卒直な言葉である、官幣大社の肩書はされても春日の宮司にして此の言葉あり、何でも知つた顔をする

人の多い世の中に全く嬉しかつた。かういふ人が知つてからやつてくれるのが一番たしかだ。(沼)

◎ 徳田秋聲の「縮圖」を讀んだ。一般的の評は兎に角として矢張腐つても銅の感を深くする。徳田一穂の後記を讀んで此書が目の目を見るまで

には並々ならぬ努力の拂はれてゐる事を知つて感激した。何でも優れたものが生れ出づる迄には隠れた大きな力があるものだ。◎ 野上豊一郎が『謡曲鑑賞』を出した初學誘導の熱意少しもなく、講議材料の羅列にすぎない、大先覺はいつの場合にも先頭に立つてもらはねばならぬ。これの失敗に比して栗林貞一の「能を見る人に」はあく迄素人趣味家の先輩として未知の若人を懇切に、根氣よく教導している。肩のこる本の多い此の社會の清涼劑である。◎ 雜誌「幽玄」能界唯一の存在ながらいさゝか堅くるしい、雜誌は特に心樂しく讀まねければ意義がない。

(觀書子)



名流藝能觀照會

升屋治三郎

人生秀れた藝術を靜かに觀照し得る幸福な境地程尊いものはない。

茲數年戰爭の大旋風が優劣に拘らず藝術作品を靜かに觀照する如き境地は完全に遮斷せられて了つた、それが爲に人々の氣持は沙漠の様に味氣なきものとなつて了つた、そして又我々は如何なる藝術が優秀なものであるか、劣悪なものであるか、云ふ事を見分ける判斷力さへ喪失して了ひ、さうな危険な境遇に置かれた。

そこへ敗戰の現實をぶつつけられた、そして總ての反動氣運が一ごきに擡頭した、混沌たる世の風潮に藝術の世界の一部も巻き込まれた、心あるものは覺悟したが滔々たる世相はいたづらに反動氣運のみを謳歌し

た、そして下劣なものも俗悪なものも大道狹しと闊歩した。

その時斷絃會は「名流藝能觀照會」を催した。誠に意義のある催しである。藝術を「靜かに觀照」する以前に、こゝろが混沌たる世相の時には先づ何が觀照すべき優秀な藝術であるかを判斷し選擇すべきかを教へなければならぬ。この點も亦今度の番組は誠に時宜を得たものであらう。只今回の催しは斷絃會の會員に限られたからその必要はあるまいが、こうした公開の催しの觀客はいつれも皆教養のある通家ではあるまい、まして今後は、多分今回の盛況に依り今後も度々開催される事と思ふ、かくの如き有意義の催しは斷絃會としても積極的に有識階級に呼びかけられる事と思ふがそれらの觀客は所謂通家ではなく寧ろ「嘉肴有りさいへども食せざれば其味を知ら」ざる輩が多くなる事と思ふから解説

書なりなんんりの方法で作品、演奏者に就ての詳細なる解説手引草が必要であらう、勿論こゝは演劇講座の教室ではないから興味索然たる解説の如きは最も戒心すべき事である。

いろいろの事情もあつての事だらうが狂言の名曲「靉猿」がしよつばに演じられた事は遺憾だつた。老齡千作氏の大名、彌五郎氏の猿曳誠に涙を誘ふ至藝であつた。一二ヶ月以前？朝の放送で狂言「金聞」を聽いて國敗れ山河ありの感を深くして不覺にも涙を流した事もあつたが今茲に至る藝の名人の藝を見て又も苦難な時代をよくも傳統の美を守つて來られた精進に目頭が熱くなつた。

地唄の「鐵輪」も「水鏡」も上方舞の代表作で優秀なものに違ひないが舞踊と云へば藤間、花柳などの派手な手の多いものを見られてゐる我々にはどここなく物足りない、「水

鏡」に到つて優雅と云ふ事だけの印象が残るだけで、アイデアの把握の困難なさへ感じる。

それからこれは誠に奇妙な現象だ
が「供奴」と云ふ様なものは派手な舞臺で賑かな前囃子に依つてのみ舞臺効果が上るものだと思つて居つたが今度の三津五郎丈の簡素な舞臺での素踊りでも充分に娛しめた、云ふ迄もなく藝の力である、寧ろ派手な背景や衣裳や小道具は反つて煩はしいのではあるまいかさへ思はれた元來「供奴」は廓の風物を唱つた詩だから歌詞にわかりにくむ通言や些か下卑た言葉がないでもないがこうした舞臺で見ると總てが淨化されてそれであつても少しも不自然ではない、そこには只秀れた三津五郎丈の枯淡な磨きのかゝつた香しい辛藝のみが存在する、これこそ日本舞踊の比類なき一つの特性であらう。

古靱太夫と織太夫に依つて語られた「戀女房染分手綱」は云ふ迄もなく古靱太夫十八番の一で聴衆はその美聲と念入りの技巧で恍惚とさせられたが後段に及んで聴衆は重ねて聞かされた名作秘曲に些か堪能したものが場内のザワメキが邪魔になつた事は遺憾である。

大軸の井上愛子さんの「娘道成寺」はこれ迄度々見た道成寺とは違つた味のものでその枯淡な手振りの内に可憐さがあり、あの大曲を終る迄些の亂れも見せない處は流石は關西の大家である。

かくの如く名匠に依る名作秘曲の上演は云ふ迄もなく教へられる處も多いが何よりも沙漠にオアシスを得た此の喜びは先づ主催者に感謝の辭を贈りたい、一面觀客の一部の人々は場内外に於て靜肅を忘れ演技の妨害になつた事は重ね重ね遺憾な事である、心當ふべき事だ。(了)

(8頁ヨリヲ續キ)

ば、よつぽご、ごうかしてゐる。家元の藝といふものは、必ずしも流儀の最高でなくてもいい、こいふ主張もあるね。大鼓の高安道喜氏だつたか、その代りにごんな遠い曲でも、即座に、ごもかくソツなく勤められるだけになつてゐるさいふ……

澁谷 家元としての態度はまた別の問題になる。功罪とも論じては限りがない。

林 とにかく、むつかしいな。結語は容易につけられない。

武智 日本の古典藝術は傳承の藝術であつて純粹、創造の活動を許さぬのだから、さうした非科學的なさころに、むしろ特徴があるのだから、この問題も容易く割切れるものではない……。家元よ、何處へ行く？

林 東西で役者の襲名の話があるの
で、それも話したかつたが、次の
機會にしよう。(九月二日)

古典の強み

九月の歌舞伎座

北岸 佑吉

盛澤山に並べられた狂言も、賑か
ではあるが、今日の大歌舞伎として
古典もの、改訂(?)だけでは、何か
もう一つ物足りない。郷田恵氏の新
作二本が、例の煽情劇でなかつたの
は救はれたが、古典で埋め切らぬも
のを、この新作が持つてゐるわけ
ないのを怨むのは、まだ無理であら
うか。

足りないといつても、やはり古典
は強い。今月は比較的小品ながら数
も多く、それだけでも満足してよい
ほどだ。殊に近松ものが二つ並んで
ゐる。「輝虎配膳」は我當が大車輪
である。少しがさつてはゐるが、役
どころとして手がけて行くだけのも
のは見出される。富十郎のお勝の役
は、吃又を女にして阿古屋の趣向を
加へた、輝虎よりも得な役で、琴を

枷にしたキマリや、幕外の引込みな
どで儲けてゐる。母は、本篇が「廿
四孝」の原典だから「三婆」と同様
に見なければならぬが、これを露仙
に振らねばならず、本當に間に合ふ
中堅どころの貧困を暴露してゐると
き、先年、變名披露狂言として當て
た「名筆吃又平」で返り咲きの又一
郎が人柄に合つた素直な演技を再び
見せ、一座への大きなプラスである
を思はせる。飢雀のお徳も、先年認
められた「引窓」のお早と同じくら
ぬにこなして、今の關西の若手では
一番よいといへるだらう。

今月の呼び物は兩長老の出る「戀
の芋環」と「妹脊の門松」である。
衰へて動きを少くしてゐるけれども
延若の求女には水々しさが喪はれて
ゐない。それに梅玉のお三輪が顔を
出すと、富十郎の橋姫より若く、忽
ち光を奪つてしまふ。二十分餘りの
延若、梅玉はその三分の一ほどしか
出てゐないが、轉んで糸の切れた糸
巻を脇にかいこんで引込む幕外の一

分間だけで、この老優の價値を納得
させる。後者で「革足袋」の人情も
この兩長老の味で生かされるのだが
又一郎の久松もそれを毀すものでな
いのはさすがである。

「浪華の夢」は痴雪翁の「九十九折」
の改作で、しかも元の方がよいとい
ふのが、京都で出たとき以来の評判
である。これはむしろ難助の二役を
賣るもので、飢雀の半七は、僅か
も近代的な憎みの如きものが加はつ
てゐるだけに、その熱演も妙なもの
だつた。飢雀としては、やはり「新
梅ごよみ」の蕩兒らしい丹次郎の方
が領ける。この作は舞臺を大阪に移
して、舊名所をさり込んでゐるが、
四幕七場の長きに、半ばから筆も混
亂し、富十郎の米八、難助の仇吉の
稽當てが繰返されて煩はしく、「鏡
山」の草履打の趣向や、「白浪五人
男」もどきのツラネを兩花道に並べ
た藝妓にいはせたり、せり出しを使
つたり、賑かな技巧を弄してゐるが
木に竹を接いだ遊戯に終つてゐる。

盆替りの文樂座

大西重孝

盆替りの文樂に久し振りで『良辨杉』が出た。志賀の里から櫻の宮物狂、東大寺、それから二月堂とこの狂言としての通しの形式が今も残されてゐるのを悦びたい。

扱て古觀太夫の「二月堂」は定評のあるところであるが、今度も亦新鮮な感銘を興へる。これこそ藝の眞生命である。守り袋の件で「かゝるしるしのあるからば」と大きな衝動に押しめられさうな恐ろしい息を語つて「そんならそなたが」と兩手を膝に突張つてまじ／＼と良辨を見守る渚の方。「そもじが」まにじり寄る良辨。「はら／＼／＼」は涙をにじませて「思はず知らず」に充分の心持を籠めて「縫りイつき」は力強く「喰ひしばりてぞ」の後に流浪

三十年の艱難と、歡喜を一つにした忍び泣きを聴かせる巧みな技巧——情景兼れ備はつた一段中の壓巻といふを憚らない。

渚の方は従前通り文五郎の持ち役であるが、良辨上人は初役に紋十郎が遣つてゐる。紋十郎の藝域がこの方面に擴がることを悦ぶと共に「そよこの風のたよりさへ」で右斜に見上げる科に良辨の肚を見せる工夫をこの新人に期待することは無理ではないと思ふ。

晝の部では大隅太夫の「引窓」が中心であるが、印象がもう一息稀薄である。再建文樂以來、以前の如き三段目語りとしての役割を避けて、先代大隅系の寫實的藝を聴かせようとの企劃はよく判るのであるが、最初の「封印切」の成功から、續く「籠坂」「吃又」「油屋」と大隅に期待をかけて聽いて来たが、先代寫してあらうと想像される寫實的な演奏が一

段を押し包む感銘にまで盛り上つて來ない感がある。前半は結構であるが、長五郎が駈出して來るところから、母親が義理の十に對する愛情に目醒めるまでの人情のからみ合ひにもつと／＼掘り下げる餘地がないであらうか。「二月堂」の如き單純、平板な作に於てさへ古觀式の苦澁に終始する表現が要求されてゐることを考へて見たい。

その外『夏祭』の「泥場」では織太夫と相生太夫とが團七と儀平次とを一日替りで勤めて伯仲の藝を競ぶが、織が團七にまはつた時にはこの一段をリードする力を感じさせる。時局柄殺しの手帳には改訂が加へられてゐるが、團七の刺紋を施した裸体の動きの繪畫美の豊かさ、「三婦内」で、三婦がなまこの八とつばの權の足と手とを引張つて入るさ、この茲にも人形獨特の面白さを認める

寶塚の新國劇

澁谷武雄

新國劇は北條秀司氏作「ぼんぼん」菊田一夫氏作「長崎」を上演して居る。北條氏の「ぼんぼん」は大正十三年京都四條室町に古き暖簾を誇る京紅間屋「べに福」の一人息子（ぼんぼん）の縁談を巡つて祇園會の宵山を中心に展開される此一篇は作、演出、演技共に揃つて優秀な成績であり近頃の佳作と云ひ得るにらう。

この劇の主題が極めて平凡なものであり乍ら存外に佳作たり得たのは此作品の背景をなせる京都を愛し、宵山の零園氣を愛する作者の抒情詩的な氣持が此一篇に充分發揮されて居るからである、此作品の成功は勿論作者の勞作を多とせればならぬが主人公ぼんぼんに扮した辰己の演技

に一つの新しい途が開拓されたことは大きな收穫だつた、こもすればマンネリズムに陥入り勝な彼の演技力に相當中のある藝を示したことは注目されてよい、尙辰己の相手役となり女中お米に扮した新人湯山秀子の演技は刮目すべきものがあつた、彼女の素直な演技力が其エロキューションの正確さと俟つて此舞臺を充分効果的たらしめた點稱讚されてよいであらう。

前記「ぼんぼん」が佳作たり得たのに反して菊田氏の「長崎」は全く期待に反し之が氏の作品かと信じられぬ程の愚劣低調なる作品である。三尺物がピストルに變つた現代股旅物とも稱すべきものだらうが同じ股旅物なら今少しく何んとか出来ぬものだつたのか、新國劇が依然としてこんな脚本を採用せればならぬとしたり其企劃の無批判な點を相當自己反省する要がある。俵藤理事が引退

し今は島田、辰己の兩君が一座の全責任者となり、一切の切札を握つて行かねばならぬ時、「長崎」の如き低調なる脚本を採用せればならぬのは全く企劃の貧困性を立證して居ること云つても過言ではなからう、再出發を期する此劇團は過去の傳統とも稱す可き悪い面を精算し切れず今日依然劇團の針路を暗中模索の状態に停頓して居るが如きは大に再考されねばならぬ、敢へて評に替へて苦言を呈する次第である。

觀 照 第二號

昭和二十一年九月二〇日發行

編輯 林 秀雄
發行 林 秀雄

大阪市東區道修町二ノ一
林 秀雄方
發行所 觀 照 社

頒價 送料共 二圓